

温泉の開発と経営

室井 渡著, 室井 晉校閲, 地人書館
384ページ, 定価5,150円

フィールドに出ていると、疲れて帰った宿に温泉が備わっていると、湯舟にのんびりと手足を伸ばす快感を味わうのを至福の境地とするのは評者だけではなからう。このように温泉の恩恵をたっぷり受けていながら、我々は温泉利用の技術については知らないことが多い。どこにどれくらいの深度を掘削すれば温泉に当たるかを探るのは地球科学者の得意業の一つである。ところが、探り当てた温泉が自噴すればよいが、そうでなく深いところに温泉水位があるとき、どのような揚湯設備があればどれくらいお湯を汲み上げられるか、引湯する間にどれくらい温度が下がるか、適した浴槽のサイズは、というような利用上の問題になると、往々にして無知である。最近のようにどこにでも温泉用の深い掘削が行われると、自噴しない深い温泉水位の温度の低い温泉がたくさん現れ、利用のために頭を悩ますことが多い。そんなときに役立つのが本書である。

本書の著者室井 渡氏は、1906年に生まれ東京帝国大学理学部地質学科を卒業し、配管施工コンサルタント会社を創業運営した。室井氏はその豊富な経験と知識を活かし、1969年に「温泉の開発と利用」を上梓している。本書はその改訂版に当たる。室井氏自身は惜しくも故人となったが、家業を継いだ息子の室井 晉氏が、この種の良書待

望する温泉開発関係者からの要望に応え、旧書を見直し古い記載や誤りを改めて書名を変えて出版したものである。そこには、原文の趣旨をなるべく活かし、計算ミスなどの細かい点も改める入念な校閲が行われている。

本書の1章と2章は、温泉の生成に関わる地球の変動の歴史と営みについての記述であるが、地質学を専攻した著者の素養の躍如たる部分である。当時はまだ普及段階であったろうプレート理論も含めて、要領よくまとめられており、地学にな案内な者にも読みやすい。3章の地温と噴気ガスでは熱学の基礎、4章では温泉の生態と分類が平易に書かれている。本書の白眉は、5～14章の温泉の開発・利用に関する実用工学的記述である。そこには、温泉の採取・造成法、汲み上げ・引湯に関する諸問題、温度損失、浴槽の設計など、実際に役立つ事項が、豊富な事例とともに紹介されている。読者は、内容を完全に理解しておかなくてもよい。身近に置いておき、温泉工学上知りたい問題にぶつかったときにひもとけば、さまざまなケースに適應できるダイアグラムや計算例が問題の解決を助けてくれる。

内容的に目新しさはなく、温泉の分類など現在では改められている部分があるが、遺業の趣旨を忠実に生かそうとした校閲者の態度によるものと好意的に理解したい。湯原・瀬野「温泉学」、川島ほか「温泉法の研究」、金原「日本温泉・鉱泉分布図及び一覧」、日本温泉協会「温泉必携」などと共にそろえておけばいっばしの温泉の専門家になれるそんな一冊である。

(環境地質部 野田徹郎)

